

\*\*\*\*\*

## ア 行

\*\*\*\*\*

あませがわ 【琴丘町 <sup>あませがわ</sup>天瀬川】

## \*あませがわ\*

鹿渡、真坂の中間に「天瀬川村」がある。中世末期に浜瀬村に馬場目村から移住した人々が開いた新田村といわれ、「正保一国絵図」では鯉川村の内

に包摂された。

寶永4年(1707)頃になると、山間部の市野、種沢の両村を枝郷とするほど、村は大きく発展した。

また、織田信雄が豊臣秀吉によって天瀬川に流された記録があり、現地にその伝説も残っている。信雄は織田信長の二男で、悲劇的な運命に亡ぶが、キリシタンに心を傾けたこともあったといわれている。

ちなみに天瀬川の伝説では、現地に織田家があり、家伝の「血のみちの薬」は信雄が伝えたものか。小玉家には信雄が兜に隠していた観音経一卷と、太元明王像があるとかいう。

(1988年 ぬめひろし著 <sup>はなし</sup>地名譚)

## \*あませがわ(琴丘町)\*

八郎瀧東岸、羽州街道沿いの鹿渡・真坂の中間に位置する。郡境を画す南端の三倉鼻の險路は、文禄～慶長年間の秋田実季による改修を経て、慶長8年に羽州街道として整備された。

〔近世〕天瀬川村。江戸期～明治22年の村名。出羽国山本郡のうち。秋田藩領。中世末期の浜瀬村の地に、秋田郡馬場目村から移住者が開拓を進め、天瀬川新田村として成立したと確定される。「正保国絵図」では、まだ鯉川村のうちに包摂。「元禄七郡絵図」で天瀬川新田村150石余と図示。宝永4年頃から東方山間部の市野野・種沢両村を枝郷とする天瀬川村となる。鹿渡村の寄郷として伝馬役を負担。肝煎は小玉長右衛門家の世襲という。「享保黒印高帳」では村高183石余・当高152石余(うち本田68・本田並48・新田36)、「寛政村附帳」では当高157石余(すべて給分)「天保郷帳」

は152石余。戸数は「享保郡邑記」で37軒(うち枝郷分23)、「秋田風土記」で60軒。八郎瀧漁業関係史料に当村名が多見する。村鎮守は磯前神社。明治22年山本郡鹿渡村の大字となる。

〔近代〕天瀬川。明治22年～現在の大字名。はじめ鹿渡村。昭和7年からは鹿渡町、昭和30年琴丘町の大字となる。

(1980.3出版 角川日本地名大辞典 5 秋田県)

## \*あませがわ\*

浜鯉川村を出た羽州街道はふたたび国道7号に合流し、途中右手に「天瀬川一里塚」を見て、まもなく国道から東南に別れ天瀬川集落に入ります。200mほど行った左手の小玉千代司(現廣光氏)

宅地内には、天下の英雄織田信長の二男織田信雄 <sup>のぶかつ</sup>公館跡と井戸跡があります。

国道7号沿いの能代山本スポーツリゾートエリアシンボル塔前より東に折れ天瀬川～市野線を1kmほど進んだところに磯前神社が鎮座しています。現県道が天瀬川集落内から山本郡と南秋田郡の郡境でもある三倉鼻に登り、六尺地蔵を拝み降って真坂村へ進みます。

天瀬川村を出て真坂村(現八郎瀧町真坂)までの道筋は、鉄道と人家のため消滅しており、天瀬川集落内の県道が、その間では唯一残っている羽州街道です。

〔参考資料〕歴史の道調査報告VI「北部羽州街道」

秋田県教育委員会)

## \*織田信雄公館跡\*

戦国時代の武将・織田信長の二男信雄 <sup>のぶかつ</sup>の居住跡といわれています。豊臣秀吉によって、秋田城介実季に配流され、実季は天瀬川の肝煎喜右衛門に預け同処に館を築き留まったといえます。時に、天正18年(1590)、ここを「ノブコ島」といい、邸中には実結ばざる黄金葉の柿一樹あり、隣の真坂村に産する甜瓜は、切口が織田家の紋章に似たるをもって「御文瓜」といいます。古井戸もあり、滞留は1年少し、この間小玉家の息女信を侍し、信は信雄の子を宿しましたが、その出生をみる